

コンタクト・インプロ ヴィゼーションのスキル研究 —初期実践者の記述を中心に—

お茶の水女子大学大学院 福本まあや

1. 研究目的

コンタクト・インプロヴィゼーション (Contact Improvisation. 以下 C.I. と略記) は1972年合衆国においてパクストン (Paxton, Steve. 1939—) が「接触を通して可能となるコミュニケーションの探究」として始めた、ダンスの即興の形式である。その訓練法は、定期刊行物や指導者会議を通じて多くの実践者によって模索・共有され、80年代前半にはほぼ確立した¹⁾と見ることができる。

本研究では、C.I.を支えるスキルを初期実践者の記述を中心に明らかにする。さらにスキルの目的をとらえることから、初期の指導者らが伝えようとしたC.I.の活動を浮かび上がらせることを試みる。また、本研究者が着目する実践時における特殊な身心の状態—「リラクゼーション」が、スキル全体においてどのような役割を果たしているかを考察する。

2. 研究方法

C.I.についての研究は1980年代半ばから合衆国において発表されている。その内容はC.I.の社会的・歴史的な位置付けが中心で、訓練法の理論的基盤すなわち、スキルの概念を総合的にまとめた研究は見られない。そこで、本研究では、以下の定期刊行物及び文献を中心に、文献研究を行なった。

- i) Smith, N. S. and Nelsom, L. (Eds.) (1975-2000) Contact Quarterly. Contact Editions. Massachusetts.
- ii) Novack, C. J. (1990) Sharing the dance. University of Wisconsin Press. Wisconsin.

3. 結果及び考察

(1) C.I.のスキルの要素

スキルを表す語句を80年代前半までの指導者による記事より抽出した。スキルを表す語句は、本研究の語義規定に則って設定した分類枠、「身心の状態」、「感覚」、「身体的な技術」、「態度」のそれぞれに確認された。

- ① 身心の状態 (states of body & mind) — 「リラクゼーション」スキルとしてとらえられた「身心の状態」とは「リラックス」し、「オープンな状態」であることによって、自らの「身体感覚に集中」し、「用心深い状態」である。この状態に至り、実践においてこの状態を維持する能力を本研究者は「リラクゼーション」と呼ぶこととした。
- ② 感覚 (sensations) スキルとしてとらえられ

た「感覚」とは、持続的に姿勢の変化が起こるC.I.の活動において「反動・重さの感覚」や「方向喪失 (disorientation) を受け入れる感覚」を身につけることであり、「末梢的な視覚」を用いることである。

- ③ 身体的な技術 (physical skills) 実践者がC.I.に必要な身体的な技術として示した内容には、C.I.の実践において出会うかもしれない動き—落下の方法、リフトのやり方—が示されている。これらの動きをエクササイズとしてあらかじめ経験することで獲得される技術とは、「安全に動く技術」であり、「効率的に動く技術」である。

- ④ 態度 (attitude) 「態度」のスキルにおいて重要なことは、「探究の態度」をもちつつも、「委任の態度」をもつことである。

(2) C.I.のスキルの構造

「リラクゼーション」は、体重のやりとりを行うC.I.の実践において特に重要な「重さの感覚」をマスクしないために重視され、「感覚」のスキルを支えている。また「感覚」のスキルは方向を見失わずに安全に効率的に動くという「身体的な技術」を支えている。「身体的な技術」の獲得は、探究しつつも委任するという「態度」のスキルを支え、この「態度」のスキルの獲得によって「リラクゼーション」がさらに促される。スキルは相互に支え合う構造が見出される。中でも「リラクゼーション」はスキルの根幹としての役割を担っていると考察される。また、スキルの目的は「安全に動く」「動きの流れを経験する」「豊かで生きた即興を経験する」「相互作用/コミュニケーションとしての即興」の4つにまとめられる。

4. まとめ

C.I.の実践者は身体的接触を行なう、体重のやりとりを行う、というこの形式の探求を前にして直面した様々な問題を解決するために、C.I.に必要なスキルとは何かを模索し、その訓練法を発展させたと考察される。

中でも「リラクゼーション」は、「重さの感覚」を重視するこの形式において、第一に身体的な要請から重視されているが、このことは同時に、雑念の無い心の状態をつくりだし、実践者がこの形式の探究に向かいつづけることを可能にしたととらえられる。

註：a) Paxton, S. (1981) Q & A. Contact Quarterly. 6 (1) :47. b) Novack, C. (1990) Sharing the Dance. c) Warshaw, R. (1982) What are we teaching? Contact Quarterly. 7 (3 / 4) :19. d) Smith, N. S. (1986) le European Contact Teachers Conference. CQ/CI Sourcebook, p.98.